

ついに彼のことを紹介できると知って、私の胸は躍っている。

彼と出会ったのは、二年前の特定健診のことだ。

コロナ禍の影響でテレワークになっていたから、自宅周辺で受けよと会社から通達があった。どうせ自腹を切ることはないのだからと、そこらへんの医院は選ばず、一駅向こうにあるクリニックにした。これで行き帰りの時間も含めて、悠々と仕事を抜けられるというものである。

いざクリニックについてみて驚いた。このエリアでは最大規模の人間ドック施設だけあって、窓にはステンドグラス、フロアには小綺麗なソファがある。そのうえ病院のスタッフはみんな親切で、これまで会社指定で受けていた健診よりよほど居心地がよかった。会場内の迷える子羊を優しく導く病院スタッフ、微笑みを交わしながらの血液採取、懇切丁寧なカウンセリングなど、ある種のおもてなしを受けている気持ちになった。

気分上々の私の耳に、ときおりハキハキした男性の声飛びこんでくる。健康診断の会場で聞くことのない性質の声色だ。気になって目で追うと、声の主はバリウム検査を担当している技師だとわかった。すらりとした細身の中年男性で、正統派のイケメン枠に入るマスクをしていた。

しかし、もっとも注目すべき点は、彼の直立不動の姿勢だと私には思えた。とくにピンと伸びた背中に、なんともいえない既視感がある。あれ、なんだこの感じとモヤモヤする私の前で、

「お待ちのタナカヤスヨさま、こちらへどうぞ」

と彼が明るく爽やかに言葉を発す。

その瞬間、ひらめいた。

そうか、体操のお兄さんだ。

姿勢のよさ、ハツラツとした声の調子、全身からそこはかとなく立ちのぼる品行方正さ。それらが相まって、体操のお兄さんを彷彿とさせるのである。クリニクの雰囲気溶けこんでいるとは言い難いが、ある種の清々しさがあるのは否めない。

ときおり彼のハツラツとした声を聞きながら、粛々と検診は進み、ついにバリウム検査の番がきた。彼が発音すると、平々凡々とした自分の名前さえ小気味よく聞こえるから不思議だ。

部屋に入って間近に彼を見る。よりいっそう体操のお兄さんオーラが全開で、たぶんここでナントカ体操を始めてもなんら違和感はない気がした。彼が操作ブースに入る。スピーカーからの声も、やっぱりハツラツとしている。彼の指示通りに胃を膨らませる薬とバリウムを飲んだ。

検査台が躍動しはじめて、スピーカー越しに彼の指示が飛ぶ。

『うつ伏せになって、いえそれは仰向けですね、そうそう、それこそがうつ伏せです。右回りで、いえいえそれは左、ええ、ええ、そう、そうです、上手ですよ、さあもう一度回しましょう』

エレベーターとエスカレーターの理解がときにテレコになる私は、仰向けとうつ伏せもだいたいそうなる。ついでに右と左もわりと喪失してしまうので、ドタンバタンとあっちゃこっちゃになる。

できの悪い私を前にしても、彼は懇切丁寧に導いてくれる。それどころか、なにか微妙に熱量がアップしているような気さえする。喉元まで迫りくるゲップと戦いながら私は思う。

『出そうになりますね、がまんがまんですよ』

彼に励まされて、ゲップを押し戻す。なんとか正確に指示を遂行しようとするものの、やはり時々なにかと間違えてしまう。あわあわするが、きちんとできたときに彼がすかさず誉めてくれるので、私の中でミスは帳消しになる。

しかし、彼は褒めるのがべらぼうにうまい。

指示通りグリングリンできたとき、ピンポイントで右の横っ腹をカメラ前で静止させたとき、彼は絶妙なタイミングで誉めてくれる。なんだか、だんだんと嬉しくなってきた。

彼がブースから出てきて、検査台についている器具をパチンと動かした。

「これから検査台が傾斜しますから、念のためのストップパーです」

私の不安を取り除いてから、彼はキビキビと操作ブースに取って返す。

『ではいきますよ、しっかりと握ってください』

頭を下に向けて傾斜する検査台。もう落ちる、と思うほど傾いていく。頭にじんわりと血が集まって、指の先が心なしか痺れている気がする。

『ええ、そう、もう少しです、ここが踏ん張りどころ、はい、がんばって』

スピーカーから聞こえる彼の声も、どんどん熱量が増していく。そのテンションはもはや体操のお兄さんレベルじゃない。朦朧としながら、なんだこの感じはなんだと私は思う。彼のテンションに煽られて、私の中の熱量も増し増しになる。そうだ、なんとしてもやり遂げるんだ、ファイト・イツパーツ！ もはや気分はリポDである。そういや、あのCMいつの間にか見なくなったな。検査台がじりじりと動く。やがて検査台ごと、体が垂直になった。霞のかかった頭のまま、モヤモヤの正体を突き止めようとしている私は、はたからは精魂尽き果てたように見えたかもしれない。

そのときである、テンションが最高潮に達したのであろう彼が言い放った。

『大丈夫、もう少しです！　すでに佳境は過ぎました！　終わらない検査はありません！』

瞬間、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンのジョーズと戦うアトラクション・クルーの姿が、脳裏をよぎった。

まさに、まさに！　間違いない、彼のテンションはアトラクション・クルー

のそれと同じだ。

これはバリウム検査機という名のアトラクションであり、そして彼こそが、アトラクション技師だ。

検査台から降りた私は、アトラクションを終えた客さながらに、「こんな検査は初めてです！」と興奮を伝えた。

彼がキョトンとする。真意が伝わっていないと焦った私は、さらに言葉を重ねる。

「いやあ、ほんとアトラクションみたいで面白かったです、こんな検査は受けたいことがありません！」

突如「すみません！」と叫んだ彼は、体を九十度折り曲げてお辞儀する。

それを見てハツとする。彼はなにかをやらかしてしまったと思ったに違いない。

「いえ、違うんです、とにかく素晴らしい検査だったと言いたいです」

必死で伝えようとする私の目の前で、彼の緊張した面持ちがしだいに柔らかくなっていく。

また勢いよく九十度のお辞儀をして「すみません！」と少し嬉しそうに彼は言う。

いや、そこは「ありがとう」でしょうよと思うけれども、生真面目な彼らしい気もした。